

# 音声学・音韻論の研究

山田 英二

今期(2016.4-2017.3), 英語音声学・音韻論の分野では, 主たる論考・著作が101篇(冊)見出された。

このうち国内の学会誌や紀要における論文は, 29篇が目に残った。前回は28篇であったので, 今年度も趨勢は変わらない。全国から届けられた1579冊(本年度分)の文系学会誌・紀要を渉猟したが, 遺漏があった場合はお知らせ戴ければ幸甚である。

パソコンにキーワードを入れて検索するだけで, 相当数の論文情報がオンラインで入手可能な時代となった。しかしながら全国の大学や研究機関の名の下に発表される論文・紀要の類は, 未だネットワークの網にかからないものが殆どである。そうした萌芽的もしくは先端的研究に括目されたのは前任の荒木一雄先生で, 若い時分拙論を本欄に挙げて頂いたことが爾後研究の大いなる励みとなった筆者もまたその伝統を継ぐ。

今回は, 以下の気鋭29篇につき向後への展開を期しつつ特筆したい。

1. Mariko Sugahara, “Is the Perception of English Stress by Japanese Listeners Influenced by the Distribution of Accent in their L1?: In the Case of Truncated Word Stimuli” (同志社大学人文学会『同志社大学英語英文学研究』97号) — 母語による音韻知識が第二言語の知覚に影響を与えていることを, 執筆者はSugahara (2016) (昨年の本欄参照)で示したが, 本論ではその主張を別の観点, つまり短縮語を用いた広範な実験で支えたものである。さらに語末から3番目の拍(モーラ)にアクセントを置く日本語(東京方言)と英語などにも見られるいわゆるラテン規則との密接な関連性にも言及している。日本語アクセント規則とラテン規則との共通性を, 拙論Yamada (1992)で普遍文法の立場から指摘していた(本欄)筆者としては, 得心できる主張である。

2. Chung-Yu Chen, “Word Frequency, Entry Date and Entry Status in Relation to Stress Shifts in English Noun-Verb Pairs” (日本英語学会『English Linguistics』33:2) — 英語の二音節語で名詞・動詞の二つの働きを持つ同一綴字語252語について, その三種類の強勢タイプ(P: 例, *préssure* (N), *préssure* (V); O: 例, *présérve* (N), *présérve* (V); D: 例, *présent* (N), *présént* (V))における史的な強勢位置移動の速度と, それらの使用頻度, 出現時期, 出現時の範疇との関連性を詳細なデータを基にして統計的に調べている。例えば, 名詞として出現した語のうち7割以上は現在Pタイプ(名詞・動詞共に第一音節に強勢)になっているという。また, Phillips (1998)

が主張する「使用頻度との関連性」は見いだせなかったと結論づけている。

3. 藤原保明, 「複合名詞における man の母音弱化」(近代英語協会『近代英語研究』第32号) — 英語の名詞複合語の第二要素には blackboard などのように第二強勢が置かれる。ところが, salesm[ə]n などの複合語の第二要素は母音弱化して曖昧母音 [ə] となっている。これらの存在は, 音韻理論上問題であり, 従来はこの第二要素の -man は派生のある時期に(語から)接辞に降格(demotion)されるという, 幾分説得力を欠いた説明がなされていた。本論は, この問題を史的観点から考証したものであり, -man 複合語に見られる5つの異音の形は共時的な類型ではなく通時的な変化の過程を示したものであると論じている。共時的方法では捉えられない詳細な事実と説明が展開された, 実証的で説得力のある論考である。

4. Shin-ichi Tanaka, Clements Poppe and Daiki Hashimoto, “Containment Eradicates Opacity and Revives OT in Parallel: Some Consequences of Turbid Optimality Theory” (書誌は日本の単行本欄2に記載) — Tanaka (2014b, c) などで展開されている Turbid Optimality Theory をさらに発展させた論考である。やや行き詰まり感があつた最適性理論(OT)に Turbid という新たなかつ理論の初心に戻る仕組み(Parallelism)を与え, OTの新しい方向性の一つを示している。

5. 本間猛, 「Motorolaは, 混成か接尾辞付加か」(書誌は上記4に同じ) — Motorola は, motorcar と Victrola の混成ではなく, motor に接尾辞 -ola を付加したものであると主張している。新語創成と接尾辞との関係性について, 平明に論じられている。

6. 柴田知薫子, 「英語の発音表記と音声指導の方向性」(群馬大学『群馬大学教育学部紀要: 人文・社会科学編』第65巻) — アメリカ英語やイギリス英語ではなく, (我々が今後学ぶべき)リンガフランカとしての英語音声を考える際に一番の問題となるのが, どの母音の発音を支柱とすべきかということである。この問いを中心に据え, 英語の母音体系や子音体系の記述に真摯に取り組んだ好論である。

7. Chang-Kook Suh, “En-prefixation and the Righthand Head Rule in English” (日本音韻論学会『音韻研究』第20号) — blacken, brighten, broaden などの動詞形成接尾辞 -en は形容詞を動詞に変える。これを William (1981) は, Righthand Head Rule (\*形態的に複雑な語の主要部は語の右側の要素であるとする規則)により説明した。その例外となるのが, encase ([en] + [case]<sub>N</sub> → [encase]<sub>V</sub>), enable ([en] + [able]<sub>A</sub> → [enable]<sub>V</sub>) などの動詞形成接頭辞 en- である。本論はこの問題に OT の枠組みで答えたものである。SSP (Sonority Sequencing Principle) を始めとする3種の制約を Right Head Rule よりも上位のランキングとして措定することにより, 問題の解決を図っている。

以下, 主要論文名と書誌のみ掲載する。8. 平郡秀信, 「ME /eu/ と ME /ɛu/ の融合について」(中京大学『国際教養学部論叢』第9巻第2号) 9. 石崎達也, 「フォルマ

ント移動に注目した英語母音の発音指導方法の考察」(東北大学大学院文学研究科『言語科学論集』第20号) 10. 熊田和典, 「17世紀の音声学者の [θ] と [ð] の分類と記述」(埼玉学園大学『埼玉学園大学紀要: 人間学部篇』第16号) 11. 靱山陽子, 「ヘンドルの英語作品の歌詞の扱い——英語の発音変化の視点から」(愛知県立芸術大学『愛知県立芸術大学紀要』No. 46) 12. Christopher Tancredi, “Discourse Givenness and G-marking” (慶應義塾大学『言語文化研究所紀要』第48号) 13. 藤原保明, 「大母音推移再考——目的論的アプローチ」(聖徳大学大学院言語文化学会『言語文化研究』第15号) 14. Hisao Tokizaki, “Prominence and Structure of Compounds” (日本英語学会『English Linguistics』33: 1) 15. 山本武史, 「英語の形容詞の比較級の語形とフット構造について」(書誌は日本の単行本欄2に記載) 16. Kazuaki Ichizaki, “A Phonetic Study of President Obama’s Utterance in Dialogues and Speeches” (日本音声学会『音声研究』第20巻第3号) 17. 時崎久夫・稲葉治朗, 「名詞修飾の語順と音韻」(日本言語学会『日本言語学会第153回大会予稿集』) 18. Astha Tuladhar and Mari Akatsuka, “Influence of Accurate Pronunciation on Correctness of Spelling in Written English” (名古屋外国語大学『現代国際学部紀要』第13号) 19. Tsutomu Watanabe, “A Preliminary Phonetic Study of Tag Questions in English” (拓殖大学『語学研究』第136号) 20. 多賀吉隆, 「借用された異形態性はどこまで音韻論的か」(津田塾大学『津田塾大学紀要』No. 49) 21. Mieko Muramatsu, “An Effective Means of Improving Prosody in English: Intelligibility and Fluency in Oral Communication” (法政大学言語・文化センター『言語と文化』第14号) 22. Yoko Ichiyama, “A Preliminary Study of Orthographic and Phonological Features of Nursing English Vocabulary” (東邦大学『東邦大学教養紀要』第48号) 23. Sayako Miyauchi, “A Study on the Intonation Used in a Speech by President Obama” (東洋大学『人間科学総合研究所紀要』第19号) 24. 村上加代子, 「大学生の英語の音韻意識スキルと英語習熟度・語彙力に関する検討」(神戸山手短期大学『神戸山手短期大学紀要』第59号) 25. チェン敦子, 「小学校外国語活動における音韻意識指導の試み——『聞こえ度』を捉えさせる音節指導」(書誌は24に同じ) 26. 野澤健, 「英語母語話者によるアメリカ英語とニュージーランド英語の母音の同定」(大阪大学言語文化学会『大阪大学言語文化学』Vol. 26) 27. 熊谷吉治, 「外国語学部英米学科 English Phonetics における英語文章発音指導の諸相」(愛知県立大学『MULBERRY』66) 28. Marcus Theobald, “A new hiragana / English chart” (至學館大学『人間関係学部研究紀要』第38巻) 29. Mami Goshō, “Brand Names and Linguistics Devices: Sound Symbolism in Global Brand Naming” (慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人『Colloquia』第37号)

単行本は下記5冊が目についた。

## 回顧と展望

1. Saeko Sasaki, 『Acquiring English Sentence Stress: Pitch and Musical Sensitivity』 2016. Maruzen Planet. 2. 田中真一, 他(編) 『音韻研究の新展開——窪蘭晴夫教授還暦記念論文集』 2017. 開拓社. 3. 日本音韻論学会(編) 『現代音韻論の動向——日本音韻論学会 20 周年記念論文集』 2016. 開拓社. 4. 加藤重広・安藤智子, 『基礎から学ぶ音声学講義』 2016. 研究社. 5. 中森誉之, 『外国語音声の認知メカニズム——聴覚・視覚・触覚からの信号』 2016. 開拓社.

国外に移る. 今期中に発行された *Phonology*, *Phonetica*, *Natural Language and Linguistic Theory*, *Linguistics*, *Linguistic Inquiry*, *Linga*, *Language and Speech*, *Language*, *Journal of Phonetics*, *English Language and Linguistics*, *Journal of Linguistics* の各誌各号のうち, 英語を対象とした音声学・音韻論の論文は 41 篇見出された.

英語音声学・音韻論に関係する国外の単行本は, 26 冊が上梓された. 紙幅により詳細については HP を参照されたい.  
(福岡大学教授)